

新制大学と大衆社会

高 田 里恵子

キーワード：教養教育，エリート論

岩津先生と一般教育懇談会

今年のベストセラーらしいが、というより、ベストセラーなので決して読まないだろうと思われる本の題名の一つに『置かれた場所で咲きなさい』というのがある。もっとも、こう書くからには実はけっこう惹かれているわけで、咲く咲かないはともかくとして（いや、もはや咲くことはあるまい）、「置かれた場所」という表現に妙に心を動かされた。「置かれた場所」というのは、あとから思いかえして、ああ、これがわたしの「置かれた場所」であったのだなあ、と思いがけず発見するものなのではないか。平積みされているベストセラーを見ながら、しかしその本の内容は知ろうとせずに、自分に引きつけた勝手なことを思ってしまった。

岩津洋二先生の追悼号に書く拙文について考えたとき、この自分勝手に解釈した「置かれた場所」という言葉が頭に浮かんできた。大学院を出たばかりで若かったわたしがボーっと無自覚なままに「置かれた場所」が桃山学院大学の一般教育懇談会であり、そこで出会ったのが岩津先生だったのだ。1988年のことである。岩津さんと呼んでいたので、ここでも岩津さんと呼ばせてもらう。一般教育懇談会は文学部新設にともない消えてしまったから、わたしは一年しか体験できなかったのだが、岩津さんはこの一般教育懇談会のメンバーとして、また第二外国語の先輩教師として、さまざまなこと

を教えてくれた。

それにしてもわたしはボケすぎていた。岩津さんにとっては教えがいのある（？）新米教師だったにちがいない。そもそも一般教育という言葉自体をよく知らなかった。大学の組織がどのように構成されているのかもわからなかった、というより、知ろうとしていなかったのだ。大学院の先輩や同級生がたいてい「教養」のドイツ語教師になっていくのと同じように、自分もそうになっていくというくらいにしか思っていなかった。それでは、くだんのキョーヨーの教師とはいかなるものであるのか。これについても真剣に考えようとしていなかった。

しかし、ここからわたしにやや特殊な事情がからまってくる。第一に、これは別にわたしだけの問題ではないが、ちょうどわたしが教師になったころ、一般教育という制度自体が消えようとしていた。周知のように1991年に文部省が打ちだした大学設置基準の大綱化によって、専門教育と一般教育の区分、および一般教育のなかの区分（社会科学・人文科学・自然科学・体育・外国語）が廃止され、各大学が自由に教育内容を決めることができるようになった。1949年の新制大学の誕生とともに戦勝国アメリカから輸入された一般教育があっけなく終わりを迎えたのである。教養部を廃止し、いまままで一般教育を担当していた教師を中心に新学部をつくる大学が多く見られた。大綱化は意図せぬ結果として教養教育の衰退を招いてしまったと嘆かれたこと、しかし95年のオウム真理教事件のあと、教養の欠如がもたらす危機が指摘され、中央教育審議会が2002年に「新しい時代における教養教育の在り方について」と題する答申を提示し、各大学に教養教育の推進を求めたこと。これらはすでに過去の事柄に属するだろう。

大学をめぐるこうした一連の動きがわたしの教師生活の変動に関係してこなかったわけではない。しかしわたし個人にとって意味をもったのは、教師としてはじめて放りこまれた一般教育懇談会の豊かな歴史性であった。「豊かな歴史性」などと曖昧な言葉をあえて使ったのは、自分の「置かれた場所」を無意識に運命づけようとするいやらしさから免れたいからであるが、

いずれにしろ若干の説明が必要であろう。

わたしが一年間だけ知っている当時の桃山学院大学のカリキュラムでは学部間の壁が低く、専門教育ということがそれほど強調されていなかった。そのぶんだけ一般教育は他の大学と比べると大きな顔をしていたように記憶している。しばしば他の大学について言われているような、一般教育担当の教師の肩身が狭いなどということはなかった。いま思いかえしてみても一般教育懇談会は不思議な（もっとも、和気藹々としたものではなかったが）熱気に満ちていた。教養教育の大切さといったことが活発に議論されてもいたのだが、しかしわたしのほうで何が問題になっているかよく理解できなかった（ちなみに、いまはちゃんとわかっているつもりである）。桃山はリベラルアーツ型の大学というだけでなく、おそらく少し変わった大学だったのだろう。

一般教育の担当者に名の知れた学者が多くいたこともたしかなのだが、わたしがここで問題にしたいのはそのことではない。そうした、わたしから見れば年齢的には同僚というより「先生」にあたる人たち（しかし、ここでは岩津さんも含めて敬語を使わないことにする）は、敗戦前後の高等教育制度の変動をまともに受けた世代に属していた。その意味で彼らの言葉や行動には、大げさに言えば戦後日本の歴史が透けて見えた。

この世代の経歴を語るときは、旧制・新制という区分をもちださざるをえない。東大教養学部、立教大学を経て桃山に来たばかりであった平井啓之先生（1921～92）は京都の旧制第三高等学校出身で学徒出陣世代である。復員後東大仏文科に戻ったが、長くわだつみ会の理事を務めたことでも知られているだろう。柳父章先生（1928年生まれ）は旧制浦和高校から東大の教養学科（ただし平井先生と柳父先生は特任という立場だったので会議ではお会いしなかったが）。沖浦和光先生（1927年生まれ）は1947年に旧制浪速高校から旧制東大に進んだので、ぎりぎり旧制大学世代と言えようか¹⁾。物理の後藤邦夫先生（1930年生まれ）は、1950年3月に幕を閉じた旧制一高の最後の卒業生だった。日本史の松浦玲先生（1931年生まれ）は新制京都大学の学生

自治組織の委員として戦後史に名を刻んだ人物である。アントニオ・グラムシの翻訳者としても知られる、イタリア史の藤沢道郎先生（1933～2001）は旧制中学が新制高校に変わることを体験した世代と言える。

こうした、いわば「旧制」に属する、もしくは「旧制」と「新制」のあいだに位置する先生たちにたいして、1943年生まれの岩津さんは小学校一年生からずっと「新制」しか知らない世代であったわけだ。また、岩津さんが大阪大学・大学院に在学していた1960年代は大学進学率が上がり、その一つの帰結として大学闘争の嵐が吹き荒れた時代でもあった。岩津さんは広い意味での全共闘世代であり、わたしはそのあとのシラケ世代と呼ばれた学生で、その点では隔たりがあったのだが、高度成長期に大学が急速に大衆化していくときに若者であったという部分では共通の感覚をもっていたと、いま振り返ると思えるのである。大学進学率は、ちょうどわたしが大学に入学した1976年に約35%（短大も含む）となり、その後、とくに80年代のバブル期にはむしろ下がっていたのだが、1992年ころから、つまり失われた二十年がはじまるころから、あるいはわたしが教師になったころから上昇しつづけ、2009年についに50%を超えた。

このように見てくると、わたしがいかに大学の大衆化という歴史を生きてしまっているかがよくわかる。しかし、わたしの「先生」にあたる人たちは少し違った。わたしは自分の「先生」世代にあたる人と、一般教育懇談会や研修会という場で先生としてではなく同僚として接したときにはじめて、この世代の高学歴者たちがエリート（時に左翼エリート）であることに気づいた。ただしエリートという言葉が悪い意味で使っているのではない。あえて言えば、ある時期にはたしかに存在しえた何ものかという意味で使っている。この最後のエリート世代に学生的立場で接しえたのは貴重な体験であった。自分の話になって恐縮だが、わたしは桃山の教師生活のなかで、教養主義やエリート教育、旧制高校や学徒出陣、新制大学や一般教育（General Education）といった研究主題と出会うことができた。

さて、何につけても有能な岩津さんはこの「先生」たちからたいへん信頼

されていたし、岩津さんも「先生」たちの力を正しく評価し、ふさわしい尊敬を示していた。他方で岩津さんは「先生」たちをやや冷めた目で見えており、時に批判したり、おちよくったりしている面もあったのではないかと、わたしは感じている。これはもちろん一つには岩津さんの自由闊達にして批判精神に富み、かつなかなか辛辣な皮肉屋でもあった性格から来ていたのであろうが、もう一つには世代的な特徴をそこに見ることができた。そしてその特徴を、わたしも分けもっていたのではなかろうか。

1985年に雑誌『現代のエスプリ』は「大学生ダメ論」を特集しており、そのなかで、ある論者はこう言っている。「エリート教師がエリート学生を教育した時代から、エリート教師対大衆学生の関係を経て、大衆教師と大衆学生が対峙する時代に入りつつある。真の大学の大衆化はこれからのことである」²⁾。

岩津さんもわたしも学生としては「エリート教師対大衆学生の関係」を生き、「大衆教師と大衆学生が対峙する時代」を教師として体験することになった（それどころかわたしはいま、大綱化以降に大学に入学した世代を若い教師仲間として迎え、今度は「後生畏るべし」も体験させられている）。

フランス哲学や現代思想を担当していた岩津さんと個人的によく話したことの一つは、大衆化された大学のなかで西洋的な教養を内容とした授業が可能かどうか、有効かどうか、あるいは教養教育から離れもっと一般的に言って、どのような教育が現在の「大衆学生」にとって有益であるのか、ということだった。これは、四半世紀前の一般教育懇談会ではまだ明確には浮かびあがってきていない問題であった。今世紀に入ってから「エリート教師」が引退し、グローバル化もしくはポスト工業化社会のなかで急激に大学進学率が上がり、どの大学においても「大衆教師」たちはいままでになかった困難に直面している。

岩津さんと話していたことの延長として、もしくは中途半端ながら岩津さんへの中間報告として、大学の大学の大衆化をめぐる言説について、ここでまとめておきたいと思う。

おのずと語られるもの

高等教育の過剰問題、およびそれにとまなうとされる学力低下問題はまことに古くて新しい、新しくて古いものだろう。まだ記憶に新しいところでは2012年11月に、当時の文部科学大臣であった田中眞紀子（1944年生まれ）が新設の三大学の認可を取り消すという騒動があった。大学（生）が多すぎる、教育の質が低下している、大学設置基準を見直すべきだ、と就任したての大臣は吠えた。大臣は結局引き下がることになったのだが、常々横暴と言われる田中眞紀子も今回はあながち間違った主張をしたのではないという意見も少なくなかった。それほどまでに大学過剰と大学生の学力低下は世間の厳しい目にさらされていると言えよう。

そうしたなか、元文部科学副大臣の鈴木寛（1964年生まれ）は冷静に反論している。産業構造の劇的変化のなかで大学教育がいままでになく必要とされているというのである³⁾。端的に言えば高校卒業者の就職可能性が小さくなっているわけだが、これは各主要国に共通の問題となっているだろう。とくに、日米露（ソ）に比べていまだ大学進学率が低かったヨーロッパでは90年代あたりから急速に進学率が上昇した。主要国のなかで最も大学進学率の低いドイツでも、ボローニャプロセスの導入もあって、進学率は40%を超えている⁴⁾。

だが、大学（生）の増大を認める鈴木寛の主張において注目に値するのは、こうした状況のなかで文科系学部教育改革の必要性を訴えていることである。たしかに、明治以来、日本の大学の拡張は私立の文科系学部（日本の場合とりわけ社会科学）の増設によってもたらされてきた。もちろん戦後の工業化社会のなかで、あるいは富国强兵期や戦時体制のなかですでに、工学部系・技術系の学生数も主に国立大学において急激に伸びたのだが、それはいつも歓迎されつづけているのだ。私立の文科系学部には、あまりお金をかけずに大勢の学生を受け入れることができ、何を学ぶかはっきりしないという虚学のイメージがつきまとっている。また不況時には大学生の就職難の

害を最もこうむりやすい場所でもあった。大学過剰にたいする非難は文科系の問題であると言ってもいいだろう。ちなみに、ドイツでも大学進学率を押しあげたのは人文科学（Geisteswissenschaft）系の学生の増加である⁵⁾。事情はフランスでも同様であるらしい⁶⁾。そこで言われることも、大量の学生を安く教育し、最終的には彼らを路頭に迷わせているのではないかという非難である。

同じ問題が日本で最初に浮きあがったのは日露戦争（1904・5年）後であった。教育社会学者の伊藤彰浩によれば、戦後の不況のなかで法文系の就職難とともに教育過剰問題が出てきたのである⁷⁾。これが、ちょうどこの時期、つまり明治末期から大正のはじめにかけて小説を書いた漱石の文学の背景である。なにしろここでは帝国大学の文系学生の就職難が描かれているのだ。

この不況は第一次大戦がはじまるまで続く。一転好景気となった1918（大正7）年に高等学校令が改正され、大学令が公布（翌年施行）されると、（旧制）高等学校の数が増え、また早稲田をはじめとする専門学校が次々と大学への昇格を果たした。高等教育の大衆化を嘆く言説はこの時から開始され、現在にいたるまで続いている。

たとえば、大学令施行から二十年ほど経った1937（昭和12年）年6月、東京帝国大学内に大学制度審査委員会が設置され、高等教育制度の改革案が話しあわれたさい、大正中期以来の大学大衆化に見あった大学改革案が激しく拒絶されている。東京帝国大学のこれ以上の大衆化、水準低下、年限短縮などもってのほか、帝大をそこの私大と一緒にしないでほしい、と。法学部の末広厳太郎（1888～1951）はこう述べる。「法学部ニ於テ見レバ、大学ニ来ルベカラズ者ノ来タル点ニ問題アリ、帝大ノ法学部ニハ現在ヨリ遥ニ少数ナル者ノミ来タルベキ所ニシテ之等ニハ四年乃至五年ノ年限ヲ課スベシ、（中略）世人ハ帝大、私大ヲ混同シテ種々ノ非難ヲナス」⁸⁾。

これにたいして、案を提出した阿部重孝文学部教授（1890～1939）の弁。「今迄諸委員ノ意見ヲ承ルニ、余トシテモ帝大、殊ニ東京帝大ヲ中心トシテ

考ヘルノナラバ更ニ異論ナシ、然シ問題ハ一般ノ教育制度ニアリ、常ニ之ヲ考慮シツツ大学ヲ問題トスルコトガ肝要ナリ、〔第一次〕大戦後、各国ノ学生数が増加シタル結果、設備ノ不十分、教授負担ノ過重ヲ招来シ、次第二学力ノ規準ノ低下ヲ見ツツアリ、之ヲ如何ニシテ切りヌケルベキカガ各国ノ悩ヲ等シクスル処ナリ、同志会案モ之ヲ問題トセルモノニシテ、日本ノ大学制度ヲ全体トシテ考ヘル場合、大学ヲ如何ニスベキカラ論ゼルノミ」⁹⁾。

この時点ですでに現在と、つまり大綱化から二十年を経た現在とほとんど変わらぬ問題が提示されているのは興味深い。ただ、1937年当時の高等教育改革の動きの背景には戦時体制の強化があった。その前の昭和改元期には、マルクス主義思想の流行と、「大学は出たけれど」(1929)という有名な小津映画の題名が示すような世界的大不況のなかで、大学は左右から、また別種の批判にさらされていた。やがて太平洋戦争に突入したあとには、学徒出陣や学徒動員、高校・大学の繰上げ卒業などの変則的な事態が次々と押しよせ、大学大衆化を云々するどころの話ではなくなっていたのである。

そして敗戦と占領。しばしば指摘されるように、戦後の学制改革と日本国憲法にたいする、主に保守派からの非難および改正要求は、それがGHQに無理やり押しつけられたものだという見方から出てきている。このことは、「戦後レジームからの脱却」とやらを目指す安倍晋三(1954年生まれ)が憲法改正を掲げると同時に、愛国心を基盤とする教育改革を進めようとするところにも見てとれるだろう。すでに2006年12月、第一次安倍内閣のときに教育基本法が改定された。

話を高等教育制度に絞れば、新生民主主義日本に教育再生の指針を示した「アメリカ教育使節団報告書」(1946)がエリート教育の解体と高等教育の大衆への開放をすすめていたことは事実である。こうして、戦前日本のエリート養成を担った旧制高校・帝国大学というコースが消え、旧帝大とともに、師範学校や専門学校、旧制高校や私立大学などなどが同じ資格の新制大学として誕生する。大宅壮一(1900~70)の有名な言葉を使えば「駅弁大学」の誕生である。報告書はさらに、戦前の高等教育機関が「あまりに早期に、あ

まりに狭く」専門化をおしすすめ、「あまりに強く」職業教育に特化していると批判し、「もっと広い人文主義的 (humanistic) 態度」を育成する (cultivate) ことを求め、正規のカリキュラムのなかに「一般教育」を組みこむことを提案している¹⁰⁾。

この新制大学体制が、大学大衆化の帰結でもあり同時にそれへの異議申し立てでもあった大学紛争を乗り越えて1991年まで、ほぼそのまま続いていたわけである。91年の大綱化以降、大学設置基準が緩和されたために新しい大学や学部学科が次々に生まれた。かくてわたしたちはいま、第三次か第四次かわからぬが、この百年で何度目かの大学大衆化 (大学過剰) をめぐる言説のブームのなかにいる。

もう一度アメリカの指導による新制大学誕生の話に戻ると、アメリカ側が本当に旧制高校の廃止を求めていたのかどうか (むしろ外圧を利用して、南原繁などの日本側の人間が動いたのではないか)、あるいは「一般教育」ということでいったい何が指されていたのか、現在でも明確にはなっていない。大学基準協会一般教育研究委員会・社会科学部門委員会委員長であった奥井復太郎 (1897~1965) は、新制大学の卒業生が出はじめた1954年に次のように言っている。「指導的アドヴァイスに当たったアメリカ側の考えと、それを受取った日本が、つまり旧制大学の関係者の受けとり方との間に喰い違いがあった。それが十分検討されないままになった。ここに問題があるのではないか」¹¹⁾。

こうした「喰い違い」が生みだした旧制高校廃止にまつわる謎¹²⁾や「一般教育」の解釈をめぐる混乱¹³⁾に関しては、教育学者による数多くの優れた研究が存在するので、とてもわたしの出る幕ではない。では、わたしの視点はどこにありうるというのか。

大正中期に高等教育が大衆化しはじめてから、さまざまなかたちで大学は議論の対象となり、雑誌記事やインタビュー、対談や座談会なども含め多くの大学論が書かれてきた。先に述べたように現在でも大学をめぐる言説は日々量産されている。それはつねに、大学 (生) たるものこんなもんでな

かったはずだ、といった論調なので¹⁴⁾、大学論というより、大学批判論・大学堕落論・大学ダメ論と言ったほうがいいかもしれない。もっとも、教育学者の新堀通也（1921年生まれ）に言わせると、大学や大学生は「強者」だからこそ、ダメ論の標的になりうるのだということになる。「ダメと考えられてきた学校の生徒や劣等生にこそ、いいところがあり頼もしさがあるとし、大学生や優等生は頭でっかちで利己主義的な受験秀才にすぎないとしておく方がよほど受けがいいし、倫理感や正義感を満足させることができる」¹⁵⁾。そこには「弱者保護、人権尊重の理念や感情」も観察できる、と。この1985年の言葉にたいして、わたしたちは、現在の大学（生）ダメ論はむしろ「弱者」攻撃になってきているのだと言わねばなるまい。

大学は（建前上）国家の将来を担う若者たちを教育する場なので、それを論ずる文章はつねにまた、日本論、エリート論、教養論、若者論、学問論の色合いを帯びている。そして、文学研究者のハシクレとして興味深く感じられるのは、そうした大学を語る文章は学術研究書も含めて、語る者の立場をもおのずと語ってしまうのではないか、しかも時に自分の意図とは違うものまで語ってしまうのではないか、ということなのである。

新制の擁護

こうした、やや意地の悪い大学論論をいつか展開してみたいというのがわたしの「野望」である。とりわけ、大学論のなかにエリート言説（反エリート論も含む）の変遷史をたどってみたいのだが、ここではその一例として、戦後の大学大衆化に肯定的な言説、つまり新制大学と一般教育とを支持する言説を紹介しておこう。ただし、それが単純なエリート批判や大衆支持にはならないことに注目するのである。

当時東大英文科教授だった中野好夫（1903～85）は1949年、新制大学の誕生のときに、この新しい大学体制を擁護する論考を書いている。「遊離した知的貴族の存在は、個人的知的虚栄としてはとにかく、社会的にはなんの力でもありえない。そしてそうしたこの国社会の病弊を、少なくとも新しい教

育制度は、その本来の目的として狙っているものであり、実現の条件さえ整えさえすれば、実現の可能性をもっているものであることは、私は疑わない。単に知的水準低下というだけで、新制大学のアイデアを否定する論者に、私はともに与することはできない」¹⁶⁾。

読まれるとおり、ここには旧制高校・帝国大学出身者のエリート意識への批判も含まれているのだが、こうしたありようは、やはり新制大学擁護派であった中国文学者の吉川幸次郎（1904～80）にも見られる。まずは、吉川の教え子であった高橋和巳（1931～71）の言葉を引用しておこう。高橋は大江健三郎（1935年生まれ）との対談のなかで次のように言っている。「ぼくが〔京都大学の〕学生のころには、旧制高等学校に対する懐古趣味みたいなものをもっている年代の人が、まだ相当ぶあつくありまして、どうも先生方は旧制のほうがいいというふうに思っているんじゃないか、と考えていたんですがね。これは例外かもしれませんが、恩師の吉川幸次郎先生には、意外に、新制のほうがいいよ、ということをときおり聞かされたことがあるんですよ」¹⁷⁾。

そして吉川自身の言葉。やはり新制大学発足直後の1950年に書かれた論考は次のようにはじまる。「このあいだのこと、旧制高等学校の先生から、新制大学のジュニア・コースの先生になった友人がやってきてのはなしに、新制大学の学生は、指導者意識がなくて困るという。／——そうかしら。そうかも知れない。しかしそれはかえってけっこうじゃないか。／僕はそう返答した」¹⁸⁾。

こうして吉川は、旧制の教育体制が帝大出ら（とくに高級官僚）の「特権階級意識」をつくりだしてきたことを指摘し、新制大学が掲げる一般教育への期待を語る。「新制大学がその轍をふむのは、まっぴらごめんだ。せっかくできた新制大学だ。大いに知識をさずける。今までよりももっとひろい知識をさずける。そうしてさずけられた知識をはたらかせて、世の中に奉仕する人間、それをつくるところでなければならない」¹⁹⁾。

中野や吉川の言葉なかに観察できる第一のことは、エリート批判はエリー

トによって、旧制高校批判は旧制高校出身者によってなされるということであろう（そもそも旧制高校から文学部に行くような人間は仄かにエリート批判意識をもっているとも考えられるが）。第二に、より重要なことには、自分は大衆とは違うという立場に安住しようとする者への厳しい、しかし実はこれが最もエリート主義的な視線である。むしろここでは、中野や吉川がいかにエリートであるかが浮かびあがると言っている。

旧制高校出身者が戦後日本の高等教育の大衆化を嘆くという図は見慣れたものであろう。日本もエリートを養成しなければならんといった話になれば必ず、いまは亡き旧制高校の教育がもちだされる。ただ、1948年度の最後の旧制高校入学者（彼らは一年だけ在学したあと、あらためて新制大学を受験しなければならなかったから、学制移行期の犠牲者とも言えるのだが）のうちでいちばん若い者でも1932年の早生まれで、もう八十歳を超えている。いまでは、保守派のご老人が戦後の悪平等教育を嘆くといったイメージがあるかもしれない。

たとえば、最後の入学者である平川祐弘（東大名誉教授。1931年生まれ）は、『諸君！』の「文科省&日教組」の言いなりにやったからこうなった！という特集のなかに、「旧制高校のエリート教育の伝統を今に活かせ」と題するエッセイを寄せ、自身のエリート教育をこう語っている。掲載雑誌、特集の表題、エッセイの題名とも典型的なものであろう。「戦前いまの大学入試に相当する最難関は高校受験で、中学五年の卒業時だけでなく四年からも受験できた。このような飛び級が認められたのは大正中期からだが、才能ある若者が飛躍する上でまことに結構な制度であった。私自身は今日の受験生がストレートで大学に入学する満十八歳の年には、ドイツ語でゲテ、フランス語でモーパッサンを読んでいた。これはひとえに中学四年修了で旧制一高に入り、一高一年で新制東大へ進んだおかげである」²⁰⁾。

もろろん、老人たちが旧制高校的なエリート教育の復活を望む現象はいまにはじまったことではない。中野好夫は半世紀ほど前の1964年の論考を次のように書きはじめている。ちなみに、男子の大学進学率が15%を超えた

のは1961年であったから、当時すでに、マーチン・トロウの言うところのマス型大学時代に突入していた。

「旧制高校、つまり戦前の高等学校教育とその生活というのが、近ごろ一部老人たちにとって強い郷愁であるかのように見える。そういうわたし自身もまた、その旧制高校生活を経験してきたものであり、しかも、もう立派に老人でもあるのだが、しかしとうてい郷愁などというほどの愛惜は、わたしの場合ない」²¹⁾。

なぜなら、「わたし」が知っている旧制高校など本来の旧制高校ではないから、というふうに話は進んでいく。「大正八年だかに学制改革があり、予備門などということが廃止になってからは」、「おまけにかなり急激な大学、高校の増設があった昭和初年からは」、旧制高校も次第に変わっていったのではないのか。

「もっとも、わたしとしては郷愁はない、といったのは、戦前も昭和十年前後からの旧制高校は、形式的外観はとにかく、実質は相当に大きく変っていたと信じるからである。つまりよくいえば、超俗みずから高く持するというか、悪くいえば独善的でひとりよがりの旧制高校精神などというものの、結局は明治以来大正中期まで、高校が大学予備門などと呼ばれて、卒業後の進学にはまず心配ない、あとは大学で当然引き受けるといった呑気な時代にしてはじめてでき上ったものだと思えない。(中略) そうした昭和十年から、はからずもわたしは東大で教えることになったわけだが、一部昔ながらの学生はとにかく、全体からいえずいぶん変わったものだと感じたものである」²²⁾。

中野好夫自身も1918（大正7）年に高等学校令が改正されたあとの1920年に、新しく導入された四修制度を利用して三高に入学したので、予備門時代の出身者にすれば「ずいぶん変わったものだ」と感じられたはずで、中野はこのことに決して無自覚ではない。

このように見ていくと、現在では大学大衆化を嘆くこと自体が大衆化してしまった、とまとめることができようか。中野好夫や吉川幸次郎は相当にイ

ヤミな「エリート」なのである。

ふたたび岩津さんへ

さて、最後にもう一度、われわれが直面している大衆大学の問題に戻ろう。中野好夫は自分も旧制高校の素晴らしさをよく知っているが、しかしそれでも「旧制高校復活論」が主張する「少数エリート教育、特権教育」に与することはできないと言う。「そんなわけで、わたしは、現在の新制高校、新制大学の存在は、現代および将来社会が要求するひろい高等普通教育を受けた人材の育成という点で、決してまちがっていないと考えるものである」²³⁾。

この言葉は、大学進学率が50%を超えた現代にこそ生きるのではないかとわたしは思う。大学に押しだされてきた若い人たちを社会に送りだす最後の場所として、いまこそ大衆大学は彼らに「ひろい高等普通教育」、「今までよりももっとひろい知識」（吉川幸次郎）を授けるべきなのではないかと。中野と吉川がともに、「ひろい」という形容詞を使い、また旧制高校と強く結びついている教養という言葉を使っていないことに注目しておこう。

大学について語るとき、おのずと自分の立場が浮かびあがってしまうと言った。恐ろしいことに、もちろんそれはわたし自身にもあてはまるのだろう。自分では気づかない立場については何も言えないので、言明できることをもう一度言明しておけば、大衆化された大学においても、いや、そこでこそ「一般教育」（General Education）は必要なのではないかと確信している。

ただ、そうした希望は教育の新たな工夫とセットになって出てくるべきものであろう。わたしにもまだ何ができるのか、何をすべきなのか、何を望んでいいのか。桃山学院大学の学生たちを愛し、彼らの教育のことをいつも心にかけていた岩津さんにアドバイスをもらいたかったと思うのだが、岩津さんはいつものようにちょっと顎を引いて笑いながら、「あーなた、まずは自分で考えなさいよ」などと突きはなすにちがいないのである。

注

1) 沖浦和光先生の著作から、のちに本文で触れる旧制高校廃止時のエピソードを一つ紹介しておきたい。沖浦先生は浪速高校に在学していた1946年、自治会として旧制高校廃止案に反対するため、近畿圏の旧制高校五校（三高・大阪・姫路・甲南・浪速）の代表を集めたのだという。「新制大学案は大学の教育水準の低下を招き、特に旧制高校の廃止は日本文化の質を劣化させることになるのではないか。旧制高校はかつてのファシズムに抵抗したりベラルな人材を育成したが、それがなくなることは日本を従属国化しようとするアメリカの狙いではないか」。ところが「意外なことに三高だけは旧制高校廃止に賛成だった」、「要するにアメリカ占領軍の教育政策の全面的な支持であった」と沖浦先生は言う。三高グループは「舌鋒鋭くしゃべりまく」り、「旧制高校→帝国大学というコースをたどったエリートが日本ファシズムの官僚制度の根幹を形成したのであるから、旧制高校を残すという運動には賛成できない。少数のインテリによる知的支配の体制を崩し、大衆の教育水準の全般的上昇を目指すのが当面の課題だ、ざっとこのように主張したのである」。「結局は三高が反対ということで、この協議会は打ち切りとなった」。

余談になるが、この三高グループについて沖浦先生はこう書いている。「そのときの三高自治会の代表が力石定一〔1926年生まれ〕、萩原延壽〔1926～2001〕、島本礼一〔1927～93〕であった。のちに力石は七〇年代の経済論壇をリードする評論家となり、のち萩原は明治維新史研究で著名な歴史学者となった。島本は日銀の理事として高度成長期の金融政策の立役者となった」。たしかに、この三高生たちはのちに戦後史を彩る人物たちになったわけだ。もう少し沖浦先生の引用を続けよう。「それから約半年後に本郷に進学したが、そこでこの三人に再会した。なんと力石と島本は共産党員になっていた。四月の最初の細胞会議の日に、力石とバツリ正門前で再会したのである。このエピソードだけでも物凄いスピードで時代が動いていたことが分かる」。やがて沖浦先生やこの力石氏を中心となって全学連が結成される。「青春の光芒——異才・高橋貞樹の生涯」第17回『ちくま』第451号（2008）62頁。

2) 矢野真和「ダメ論からの出発」『現代のエスプリ』213号（至文堂、1985）203頁。

3) 朝日新聞 2012年11月23日付朝刊。

4) ウルリッヒ・タイヒラー（金子元久訳）「ドイツ高等教育の変貌」『IDE現代の高等教育』第518号（2010）14頁。ただし卒業率は低くなるので、直ちに日本の状況とは比較できない。

5) vgl. Münch, Richard: *Globale Eliten, lokale Autoritäten. Bildung und Wissen-*

- schaft unter dem Regime von Pisa. McKinsey&Co.* Frankfurt a.M. (suhrkamp) 2009, s. 167.
- 6) 大場淳「欧州高等教育再編と人文科学への影響」西山雄二編『哲学と大学』（未来社, 2009）参照。
- 7) 伊藤彰浩「日露戦争後における教育過剰問題——「高等遊民」論を中心に」『名古屋大学教育学部紀要』第 33 卷（1986）参照。
- 8) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 通史二』（東京大学出版会, 1985）621 頁。
- 9) 同書, 622 頁。
- 10) *Report of the United States Education Mission to Japan: Submitted to the Supreme Commander for the Allied Powers, Tokyo, March 30, 1946.* Westport, Connecticut (Greenwood Press) 1977, p. 52. なお、翻訳については『アメリカ教育使節団報告書』（村井実訳）（講談社学術文庫版, 1979）を参照した。
- 11) 奥井復太郎他「わが国社会の実情と新制大学——座談会速記録」大学基準協会編『会報』第 19 号（1954）12 頁。
- 12) 大崎仁『大学改革 1945～1999』（有斐閣, 1999）の第 2 章「新制大学一元化過程の謎」や吉見俊哉『大学とは何か』（岩波新書, 2011）第 IV 章「戦後日本と大学改革」参照のこと。
- 13) 土持ゲーリー法一『戦後日本の高等教育改革政策——「教養教育」の構築』（玉川大学出版部, 2006）の第五章「「一般教育」の混迷——理念の欠落」、市川昭午『未来形の大学』（玉川大学出版部, 2001）の第 II 章「一般教育——知識階級の消滅と教養教育の衰亡」、寺崎昌男「戦後日本における一般教育理解——その変遷と問題」『一般教育学会誌』第 2 巻第 1・2 号（1980）、館昭「高等普通教育としての「一般教育」」『一般教育学会誌』第 15 巻第 2 号（1993）参照のこと。
- 14) 寺崎昌男は、「大学とはこんなものではなかったはずだという思い」自体はすでに 1890 年代あたりから日本社会につくられたものであった、と指摘している。それが、新制大学発足という大変化のなかで急速に頭をもたげ、マスコミを通じて広められたのではないかと。寺崎昌男「新制大学を考える」『IDE現代の高等教育』第 199 号（1979）8 頁参照。
- 15) 新堀通也「大学生——ダメ論をこえて」『現代のエスプリ』213 号, 9 頁。
- 16) 中野好夫「新制大学批判 経済的うらづけを」『塔』第 1 巻第 7 号（1949）20 頁。
- 17) 高橋和巳・大江健三郎「現代学生の知的状況」『中央公論』（1966 年 3 月号）330 頁。なお、高橋は一年だけ旧制松江高校に在学したあと、新制京都大学を受験した

移行期世代であり、大江はちょうど新制中学発足時に中学一年生になった真正の民主主義教育世代である。父の死もあって中学進学を諦めていたところ新制中学が義務教育化されたことを知り、大きな希望と喜びを感じた、と大江は小説やエッセイのなかでたびたび書いている。

- 18) 吉川幸次郎「知識人への抗議」『吉川幸次郎全集』第20巻（筑摩書房、1960）（初出1950）116頁。
- 19) 同、118頁。
- 20) 平川祐弘「旧制高校のエリート教育の伝統を今に活かせ」『諸君！』（文藝春秋、平成18年12月号）165頁。
- 21) 中野好夫「旧制高校的なるもの」『展望』第72号（筑摩書房、1964）110頁。
- 22) 同、115～116頁。
- 23) 同、116頁。

注で触れなかった参考文献

海老原治善「激動の大学・戦後の証言⑩ 祝福されず新制大学誕生」『週刊朝日』

1969年12月14日号

奥井復太郎「新制大学への反省」『会報』第18号（1953）

清水義弘編『高等教育の大衆化——大衆化の流れをどう変えるか』（第一法規出版、1975）

竹内洋『革新幻想の戦後史』（中央公論新社、2011）の第Ⅲ章「進歩的教育学者たち」

寺崎昌男「日本の大学史上における新制大学制度の位置について」『大学研究ノート』第63号（1985）

読売新聞大阪本社社会部編『大衆大学』（読売新聞社、1976）